

※動画内で言及しているページ数と本レジュメのページ数が一致していない場合があります。

平安王朝時代

十二單 寝殿造り 几帳（きちよう）
膝行（しつこう） 牛車（ぎつしゃ）

上代（古事記・万葉の時代）と平安時代

上代
いざなみの尊 持統天皇 額田王
刀自（とじ） 女系社会・自由、おおらか
対偶婚・不安定な結婚の形

平安時代

家父長制 父権が強い 儒教的法制度
王朝の洗練された美的世界
制度に縛られた女性 女性の立場が弱くなる

○ 末摘花・宇治の姫君



枕草子絵巻
部分

1 身分社会・階級社会

男性皇族	・天皇	皇太子	皇子						
公卿	・摂政	太政大臣	左大臣	右大臣	内大臣	大納言	中納言	参議	蔵人
女性皇族	・皇后	・中宮	・内親王						
公卿の娘	(母の身分の高低で明確な差) 女房 (貴族に仕える女官)								
地方の高官	その妻・家族								

2 結婚

正妻は原則一人・親の身分やバックアップ（後見）により決まる

一番愛情が深ければ正妻になれるわけではない

高貴な姫といつても、結婚後は女房や下働きに指図をして、夫の装束や儀式に関する支度を調べる必要があり、経済力が必要

高貴な男性には正妻以外に妻や愛人が多い

天皇には、皇后・中宮・女御・更衣・その他

光源氏の正妻は、はじめ葵上、葵上の死後、源氏四十歳時に女三宮

○ 紫上は源氏に愛されたが、正妻にはなれなかつた

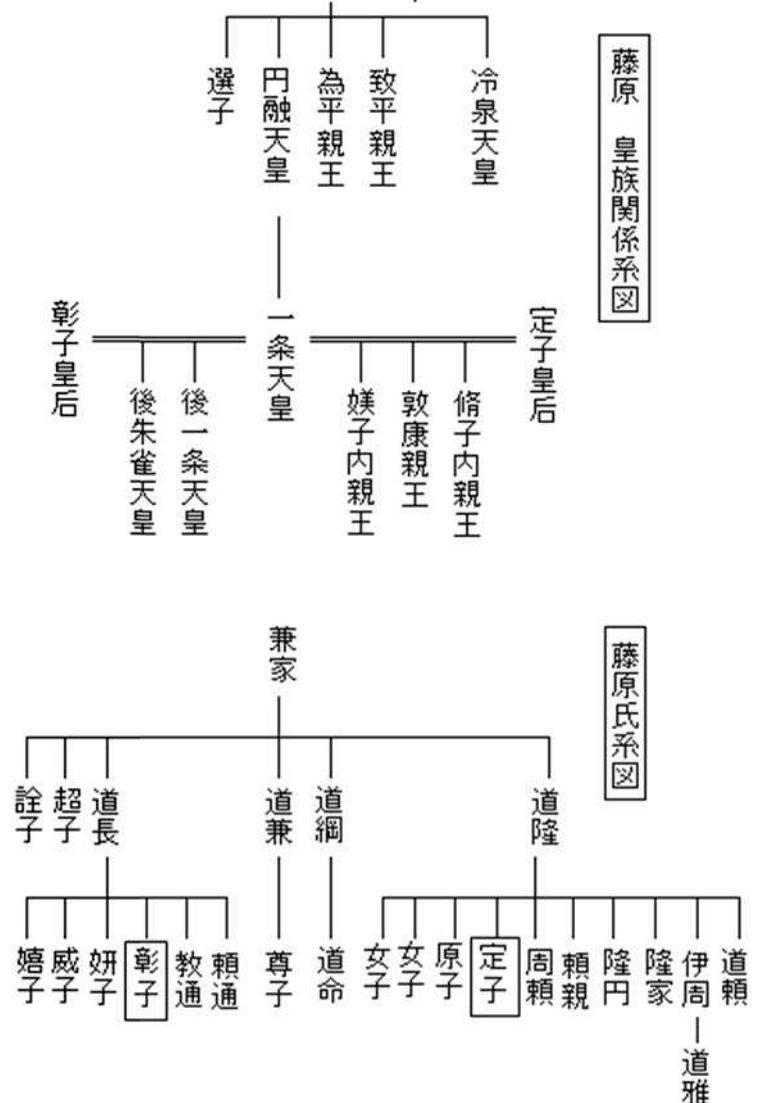
前原氏の開闢政治

閥政治……娘を天皇・皇太子と結婚させ皇子を産ませ、自分が天皇の外祖父となることで権力を握る。

- | |
|--|
| <p>A 高貴な娘は天皇に愛されるように、</p> <p>礼儀、教養（和歌・琴・琵琶・書道など）、美的センスを身につける</p> <p>自分に仕える女房たちを教育できるコミュニケーション能力を身につける</p> <p>習慣や所作</p> <p>を身につける</p> |
| <p>B 習慣や所作</p> <p>を身につける</p> |
| <p>顔は男性には見られないようにし、建物の奥について、いつも几帳や屏風、御簾に隠れ、</p> <p>扇などで顔を隠す。大きな声はなるべく出さない 簡単に立ち歩かない</p> |
| <p>結婚の時期が早い 彩子は十二歳</p> |
| <p>C 高貴な姫は一族の命運がかかり、責任が大きい。仕える女房・下働きたちの生活も姫にかかっている。</p> <p>数は明確ではないが、彩子の時には女房だけで四十人という。</p> |

藤原 皇族関係系図

藤原氏系図



香炉峰の雪

会話のセンス…雪が深く積もり、中宮が「少納言、香炉峯の雪はどうだらうか」とおっしゃつたので、女房に御格子を上げさせ、清少納言は御簾を巻き上げ、外の雪景色をお見せした。

「遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聴き、香炉峯の雪は簾をかけて看る」（白氏文集）

清涼殿の丑寅の隅の

清涼殿の丑寅の隅の、北の隔てなる御障子は、荒海のかた、生きたるものどものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる。上の御局の戸おしあけたれば、つねに日に見ゆるを、にくみなどして笑ふ。高欄のもとに青き瓶の大きなるをすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる匂方、大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の固紋の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出だして、まわり給へるに、うへの「なたにおはしませば、戸口の前なるほそき板敷にゐ給ひて、ものなど申し給ふ。

御簾の内に、女房、桜の唐衣どもくつろかにぬぎたれて、藤、山吹など、色々にこのましつて、あまた小半部の御簾よりもおし出でたるほど、昼の御座のかたには、おものまるる足音高し。

村上天皇の宣耀殿の女御藤原芳子の事

父に言われたこと

「一つには御手を習ひたまへ。つぎには琴の御琴を、人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ」

天皇はそれを聞いて、古今集の歌の詞書（どのような時に詠んだ歌などの説明書き）を語つて試験をしたが、間違えなかつたのはすばらしい。

仏教思想により、人間の運命は生まれる前の世での行いによって決まっており、生まれてからでは変えることができない。

『源氏物語』

ア 世の中といふもの、そのみこゝで、今も昔も定まりたることはべらね。中にひいても、女の宿世はさて浮かびたるなんあはれにはぐる。（帚木）

イ 女は心より外にあはあはしく人におとしめられる宿世あるなん、いと口惜しく悲しき。……後見などあるは、さる方にも思ひゆづりはぐり、三の宮なんじはけなき齡にて、ただ一人を頼もしやるものならひて、うち棄ててん後の世に漂ひさすりぐむこと、いといとうしろめたく悲しくはぐる。

ウ かしこき筋と聞こゆれど、女はいと宿世定めがたくおはしますものなれば

（若菜上）

『蜻蛉日記』道綱母 兼家の妻。

平安の美 『枕草子』

参考・新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館）

春はあけばの

春はあけばの。やうやうしろくなりゆく山起きは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、虫のおぼく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥のねどころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

あはれなるもの

「九月つごもり、十月のついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声」
「秋深き庭の浅茅に、露の色々の玉のやうにて置きたる」

病は（病の女性）

十八、九ばかりの人の、髪いとうるはしくて、たけばかりに、裾（すそ）いとふさやかなる、いとよう肥え、て、いみじう色白う、顔愛敬づき、よしとみゆるが、歯をいみじう病みて、額髪もしどに泣きぬらし、乱れかかるもしらず、おもてもいと赤くて、おさへてゐたるこそ、をかしけれ。

八月ばかりに、白き單衣（ひとぐ）なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあてやかなるをひきかけて、胸をいみじう病めば、友だちの女房など、かずかずきつつとぶらひ、外のかたにも、わかやかなる君達（きんだち）あまたきて、「いとほしきわざかな。例もかうやなやみ給ふ」など、「ことなしびにいふもあり。心かけたる人は、まことにいとほしと思ひなげきたること、をかしけれ。いとうるはしう長き髪をひき結ひて、物つくとて、起きあがりたるけしきも、「ひうたげなり。上にもきこしめして、御読経の僧の、声よき給はせたれば、几帳ひきよせてすゑたり。ほどもなきせばさなれば、とぶらひ人あまたきて、経聞きなどするもかくれなきに、田をくぱりてよみぬたるこそ、罪や得らむとおぼゆれ。

A 大将も督の君も、みな下りたまひて、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ夕映えいときよげなり。

B ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々紐解きわたる花の木ども、わづかなる萌木の蔭に

桜襲（さくらがさね）

大将の君も、御位のほど思ふ「そ例ならぬ乱り」がはしさかなどおぼやれ、見る目は人よりけに若くをかしげにて、桜の直衣（なほし）のやや萎えたるに、指貫の裾つ方す「しぶくみて、けしきばかり引き上げたまへり。軽々しうも見えず。ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかるば、うち見上げて、しをれたる枝す」し押し折りて、御階（みはし）の中の階のほどにゐたまひぬ。

C 色々「ほれ出でたる御簾のつまづま透き影など、春の手向の幣袋にやとおぼゆ。・・・夕影なれば、さやかなならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。」

金箔・銀箔・雲母摺（きらりずり）・螺鈿（らでん）・室礼（しつらい）

紫の上の最期

「よなう瘦せ細りたまへれど、かくてこそ、あてになまめかしき」との限りなさもまさりてめでたかりけれど、（来し方あまりにほひ多く、あざあざとおはせし盛りは、なかなか此の世の花のかをりにもよそへられたまひしを）限りもなく「らうたげに」をかしげなる御様にて、いとかりそめに世を思ひたまへる氣色、似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。

（御法・紫上・臨終）

「萩の上の露、玉笛の上の霞」（帝木）雨夜の品定め

御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなんと見ゆる玉笛の上の霞などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思ひるひめ、

紫式部（藤原為時娘）

九九六 父とともに越前に下る。

九九九 藤原宣孝と結婚。

一〇〇一 宣孝死去。この頃から『源氏物語』を執筆か。

一〇〇五 彰子に出仕（あるいは翌年出仕とも）。

一〇〇八 行成に「あなかしこのわたりに若紫や候ふ」と声をかけられる。→源氏物語の紫の上のことが既に書かれ読まれていた。



源氏物語絵巻 東屋一

				藤壺	桐壺帝の中宮。源氏が一生憧れる女性、源氏との間に、冷泉帝が生まれる。★運命の恋
				桐壺の更衣	故大納言の娘。光源氏の母。有力な後見のないまま桐壺帝に入内、いじめにあり、病で源氏三歳の時に病で死去。
				葵	権力者左大臣の娘、源氏の正妻。源氏の息子夕霧を生む。しかし出産に際し亡くなる。
				紫	式部卿宮の娘。藤壺の姪。実母と幼時に死別し、繼母に疎まれる。祖母に引き取られ、北山にいるときに源氏に見いだされ、引き取られ、源氏の理想の女性に育てられ生涯愛されるが、葵の死後も正妻にはなれず、二十年近く源氏と連れ添つた後に、女三宮が源氏の正妻となり精神的に傷つけられる。源氏の女性関係に悩まされた一生といえよう。
			六条御息所	大臣の娘、元東宮に入内し、姫（秋好）をもうけたが、早くに東宮に死別する。教養高く優雅な人柄の未亡人。源氏の夜離れのため苦しみ生靈となり、葵を苛み葵は死去する。後に娘と共に伊勢に下る。	
		女三宮		源氏の兄朱雀帝の娘。源氏の初めの正妻葵が亡くなつた後、源氏四十歳の時、源氏の正妻となる。	
		空蝉		衛門督の娘。両親と死別の後、老齢の伊予介の後妻となり、源氏と邂逅するが、その後源氏を拒み続け、源氏が三回目に接近したときには、衣を残して逃れる。夫の死後、繼子を避けて出家する。	
		末摘花		故常陸宮の娘。父は既に死去し荒廃した邸に住んでいた。源氏に引き取られ二条院に住む。	
		夕顔		三位中将の娘。両親とも早く死別。はじめ頭中将の愛人。正妻に脅され幼子を伴い寓居に住んでいるとき源氏に見いだされるが、源氏と共に廃院で夜を明かしているうちに急死する。	
		花散里		桐壺帝の妻である麗景殿女御の妹。	
		明石		明石入道（元近衛中将）の娘、明石に住み、父は裕福で教養高く育てられる。源氏と明石で会い、源氏にとつて大事な一人娘（明石の女御）を生む。しかしかわいい盛りの三歳の時に娘は紫によって引き取られ、紫が育てる。	
朝顔	朧月夜			右大臣の娘、源氏の兄朱雀帝の婚約者であったが、源氏と恋におちる。右大臣家の藤の宴での逢瀬が露見し、光源氏の須磨流離の原因となる。しかし朱雀帝の寵愛を受け、尚侍となる。その後も源氏への思いを抱き続ける。	
		桃園式部卿宮		（光源氏四十歳くらいまで）	
		（桐壺帝の弟宮）		の娘、源氏を拒み続け一生独身を通す。	

【一】 なにがしが及ぶべき程ならねば、上が上はうちおき侍りぬ。さて、

①世にありと人に知られず、さびしくあはれたらむ葎の門に、

②思ひのほかにらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ限りなくめづらしくはおぼえめ。いかで、はたかかりけむと、思ふよりたがへることなん、あやしく心とまるわざなる

(帝木)

【二】 親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、事にふれて思へるさまも、らうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしこ、この見たまふるわたりより、情なくうたてあることをなん、さる便りありて、かすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。・・・跡もなくこそかき消ちて失せにしか…これこそそのたまへるばかなき例なめれ

(帝木)

【三】 「たとしへなく静かなるタベの空をながめ給ひて、奥の方は暗う物むつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥し給へり。夕映えを見かはして、女もかかるありさまを思ひのほかにあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れてすこしうちとけ行くけしき、いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして、ものをいとおそろしと思ひたるさま、若う心ぐるし。

(夕顔・亡くなる前)

【四】 いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの氣色にて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなくはらはらとかかれる枕のほどがありがたきまで見ゆれば、年「ころ何」とを飽かぬ」とありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。

(葵・出産時の亡くなる葵に)

参考・新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)

